

郷土文化を育てよう

佐伯史談会会長

高木嘉吉

地球は太陽系の一惑星で、宇宙間ではまことに眇^{びす}たる存在である。しかしこの地球上に生きる者にとっては、必ずしも眇たるものではない。六大洲・三大洋・北極海南極大陸と、まことに広大無辺である。これを全部踏破することは、文明の利器をフルに使っても不可能である。

此の広漠たる土地に、地球の正確な自転（一日）と公転（一年）によって計られる無限の時が流れる。人類の発生は、五十万年前とも百万年前ともいう。地球の歴史から見れば一瞬の間であるが、平均寿命七十余年の人間にとっては、短かい時間ではない。

史書は東西ともに紀元前五千年位から記述されているが、それ以前は茫漠として、さだかでない。しかし人類は発生以来、発展を続けて、極寒の地も灼熱の地も、その足跡を印せざる所なきに至っている。

この人類の繁栄は、人類が他の動物と異った生き方をすることによって、もたらされたものである。人類の特徴は、たくさんあげることが出来るが、

- 一、後肢で直立歩行し、前肢を自由に使い得ること。
- 二、道具を使って、生活に必要なものを作る。
- 三、団体生活をして、共同して外敵に当たったこと。
- 四、言葉を持ち、意志の疎通をはかったこと。

などが最も重要なものであろう。

人類は、最初は自然に在る動植物を採集して衣食住の資としたが、その発達した脳と器用な手を使って、食料植物の栽培、動物飼育へと進んで、生活の安定確保をはかった。

これは文化の発生の第一歩である。文化には種々の意義があるが、人間が自然に働きかけて、必要なものを生

産する過程が文化活動であり、生産されたものが文化財である、とするクルツールの考え方を先ずとりあげたい。かくて生産物に対する加工の第二次文化、その流通の第三次文化と発展して、今日の経済社会が形成されて来た。科学・芸術・道徳・宗教が、文化の四本柱であることは言うまでもない。

ここまで筆を進めて、人類は最初から文化の創造発展を目ざして活動していたのだろうか、という問題に突き当る。この解答はむづかしいが、私の答は否である。人類が個体の保存、種族維持の本能にしたがって、がむしやらに活動することが、自然に文化の創造に連なつたと考えたい。

しかし時代が下って、有史時代になると、文化の創造発展をもって、人類の使命なりとする考えが出て来る。子思（孔子の孫 春秋時代後期の人）の著書『中庸』の第二十章に

「誠は天の道なり。之を誠にするは人の道なり」

の句が載っている。これは道徳の中心問題 誠についての発言であるが、誠を文化と読み替えたらどうであろうか。誠は天の道なり。之を文化にする（地上に実現する）は人の道なり。となつて文化の創造が人間の使命ということになる。

これは異議のないことであるが、実際にはそうした自覚をもって行動している人は、少ないのではあるまいか。しかし郷土文化の発掘・保存・顕彰を一つの使命とする我々は、こうした自覚に徹することが必要であろう。

最初に述べた様に、広漠たる地上に悠久の時が流れる。有史以来多数の民族の興亡が繰返されている。中には地上から姿を消した民族もある。この民族の興亡を司るのが文化であるという。即ち文化の興隆に貢献する民族は興隆し、貢献しない民族は衰亡する。文化の大破壊と見える事件も、長い眼で見ると破壊は新しい文化を育成するための大掃除であつた場合が多い。

堅田地方は過去二回外敵の侵入による戦争が行われている。一つは嘉吉元年（一四一一）の大内勢の侵攻によるもので、宇山・汐月・城村・川原等が戦場となつた。もう一つは天正十四年（一五八六）の島津軍の侵入で、汐月・江頭・泥谷・西野・岸河内・大越で激戦を展開している。この戦争による破壊は多大であつたと思うが、堅田人士はこの破壊を乗り越えて、堅田文化を維持継承して今日に及んでいる。

史談会は、機関誌の活版印刷を一つの契機として、本年は一段の躍進を期している。会員相携えて、楽しく意義深い温故知新の旅を続けようと思つている。